

令和 7 年度

自己点検・評価書  
(学校評価報告書)

附属池田中学校

## 1 附属池田中学校の現況

### (1) 学校名

大阪教育大学附属池田中学校

### (2) 所在地

大阪府池田市緑丘1-5-1

### (3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員432人(1学級36人)

### (4) 幼児・児童・生徒数

435人

### (5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 20人(うち, 臨時的雇用2人),  
非常勤講師 7人, 事務職員 6人(事務補佐員4人, 臨時用務員2人)

## 2 附属池田中学校の特徴

アントレプレナーシップ教育と国際教育に, SPS 認定校として安全教育に重点を置いている。

## 3 附属池田中学校の役割

1. 教員養成大学である大阪教育大学の研究校
2. 教員養成大学である大阪教育大学の教育実習校
3. 学び続ける教師のための, 研修・研究に奉仕する学校です
4. 常に新しい教育理念を追究し, その実践を試みる, 研究開発学校
5. 一般生徒, 国際枠生徒(帰国生徒, 在日外国籍生徒), 学校災害特別研究生徒からなる混合学級で授業を行う学校

#### 4 附属池田中学校の学校教育目標

自主・自律の精神の育成

知識 と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす。

#### 5 附属池田中学校の学校教育計画

- ①令和8年度からの3観点5段階評価への移行に合わせて、緑の学び舎を教科内で整理し共通理解することを通して、各教科でどのような力をどのようにつけるのかといった枠組みを構築し、生徒・保護者に分かりやすく提示することで、生徒の力の伸長を図る。
- ②総合的な学習の時間を中心に実施している、CP、SA、IDUを見直す。3年間を見通した効率的で効果的な指導計画のもと、生徒が探究的な学びを通し、思考力・行動力を培う機会にし、将来、社会で活躍するのに必要な力を学ぶカリキュラムを構築する。
- ③体育大会を中心に、生徒の自主・自律を促進する生徒主体の活動の機会を充実させ、生徒が達成感を感じられるとともに、行動力やリーダーシップを培う機会にする。
- ④アドバンスト・セーフティ・プロモーション・スクール認定校として、全教職員の共通理解の下、共創の考えで組織的、継続的に安全教育の実践的研究を行う。また、池田地区のめざす児童・生徒像に基づいた安全意識・態度および実践的行動力を醸成する。
- ⑤効率的、効果的な運用により、ICT機器に関わる指導の充実、生徒支援の共通理解など、基本的な業務を実施する。

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		1. 令和8年度からの3観点5段階評価への移行に合わせて、緑の学び舎を教科内で整理し共通理解することを通して、各教科でどのような力をどのようにつけるのかといった枠組みを構築し、生徒・保護者に分かりやすく提示することで、生徒の力の伸長を図る。					
本年の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)令和8年度からの3観点5段階評価への移行に合わせて指導体制を整える。	・各教科での内容の整理 ・一貫性のある指導計画の作成 ・3年間を見通した指導計画の作成 ・「緑の学び舎」の原稿作成	3観点5段階評価への移行の核となる「3年間を見通した指導計画」と、それを周知するための「緑の学び舎」の原稿作成については、各教科で概ね順調に進捗しており12月末までに提出できる見込みである。1月末までに教務主任と各教科担当で最終確認をする予定である。	今回作成した指導計画にはまだ改善の余地があると思われる。今後は、作成した緑の学び舎をもとに、計画や整理した内容を実践していく中で、具体的な課題等を抽出し、教員間で協議を重ねながら継続的に修正・改良を行っていくことが必要である。	A	「3観点5段階評価」への取組として各教科での検討及び各評価担当と教務主任との確認が進んでいることは、成果につながる第一歩である。「改善の余地」を意識しながら協議・修正・改良を踏まえていることから、指導計画の発展・向上として評価できる。	A	次年度以降の準備として整えることはできた。次年度は実際に行う中で、内容を精査・改善をしておくことが大切である。それを実現するために会議や研修を設定する。
(2)指導内容の教科内での共通理解と生徒、保護者への周知を行う体制を整える。	・教科の目標、つけない力、どのようにつけるのかを整理 ・教科内での共通理解 ・生徒、保護者に伝わる表現	指導目標や「つけない力」、指導方法に関する内容が「緑の学び舎」の作成によりかなり整理できた。また、表現面では、文字情報だけでなくイラストなどを効果的に取り入れたことで見やすさが向上し、生徒や保護者に分かりやすく、確実に伝わる表現でまとめることができた。	整理した内容が、新しい3観点5段階評価の基準と適切に連動しているかを教科内で再確認し、改善を重ねていかなければならない。また、担当が内容をきちんと把握できるよう共通理解を徹底する必要がある。	A	指導目標などを「緑の学舎」の作成により、整理できたことは大きな成果である。生徒や保護者にわかりやすい表現を取り入れるよう視点は、高い効果が規定できる。教科横断的に共通理解を徹底する方針があることも高く評価できる。	A	生徒・保護者に伝わったのか、作成した「緑の学舎」がどれだけ効果的であったのかを確認しながら、改善・改良を進めていくことが大切である。確認するポイントと時期を設定し取り組む。

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		2. 総合的な学習の時間を中心に実施している、CP, SA, IDUを見直す。3年間を見通した効率的で効果的な指導計画のもと、生徒が探究的な学びを通し、思考力・行動力を培う機会にし、将来、社会で活躍するのに必要な力を学ぶカリキュラムを構築する。					
本年の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)総合的な学習の時間を中心に実施している、CP, SA, IDUを見直し、3年間を見通した効率的で効果的な指導計画を立てる。	・CP, SA, IDUを見直しを行い、総合的な学習の時間の取組みを再構築 ・3年間を見通した指導計画	3年間で見通した総合のゴール設定として、人物像と4つの探究スキルを文言化し、3年間で段階を追ったスキルの習得を計画し、職員会議にて共有をした。1, 2年のわが町自慢、起業体験学習のガイドを作成し直し、3年のCP (EQ) に向けた流れを構築した。さらに、2年後半から取り組むCP (EQ) の計画を立て直した。次年度のSV研修についての計画を立てている途中である。	ガイドに関して誰もが理解しやすいような形式にしつつ、みんなが理解できる研修をする。教員の減少、交代の中でも質を担保できるような仕組みづくりが必要。探究を行う上での共通認識を図る研修の充実が必要。	B	目標では「指導計画を立てる」とあり、具体的な取組内容では3年間を見通した指導計画が提示されている。達成状況や改善点では、計画を立て直したことに加えて、研修計画の構築の見込みまで立てられていることから、重点目標の内容を超えたところまで活動が進んでおり、高く評価できる。	A	計画を整えて、具体的な進め方で構築することができた。実際に進めていく中で、改善・改良点が必ず出てくると予想される。今後は、学年で実行していくことになるが、共通理解のための研修の設定、全体を統括する担当の決定などを行い、継続的に内容が向上するような組織体制を構築する。
(2)生徒が探究的な学びを通し、思考力・行動力を培う機会にし、将来、社会で活躍するのに必要な力を学ぶカリキュラムを構築する。	・社会で活躍するのに必要な力を整理 ・思考力・行動力を意図的に培うことができるカリキュラムを構築	3年間で見通した総合で習得するスキルの精選を行なった。IBのATLスキルをベースに総合で学ぶ探究のゴールにつながるようルーブリックを作成した。	生徒自身の振り返りを充実させ、生徒自身がスキルを習得したと実感できるように仕組みづくりが必要。	A	社会で活躍するために必要な力として、総合的な学習において習得すべきスキルの精選を行いルーブリックを作成したことは、教育の質の向上にあたり、高い成果であると評価できる。	A	IBプログラムからの変更に伴い、ATLスキルに変わるスキルのルーブリックを整える必要がある。次年度は思考力を中心に要素を分解し、スキルとして整え、研修などを取り入れ円滑な移行を行う。

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		3. 体育大会を中心に、生徒の自主・自律を促進する生徒主体の活動の機会を充実させ、生徒が達成感を感じられるとともに、行動力やリーダーシップを培う機会にする。					
本年の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)体育大会を中心に、生徒の自主・自律を促進する生徒主体の活動の機会を充実させる。	・生徒主体の活動の機会となるような体育大会の運営 ・その他の行事や活動で、生徒主体の活動の機会の設定	・生徒会(委員会)を中心とした安全に配慮した生徒主体の学校行事の企画運営を年間を通じて行なった。 ・新たな種目を体育委員が中心となって考え、1種目の変更を実施した。また、開閉会式やデモスト練習など、生徒が主体となり、安全管理や運営を行った。デモストや新種目も含めて生徒に委ねる場面を多く設定できた。	・生徒主体で動き、行事をつくりあげる運営を今後も継続していくが、教職員、生徒ともに持続可能な形を検討していく必要がある。(充実度(満足度)と負担感のバランス)	A	体育大会では、進行や競技の審判などを生徒が担い、一つひとつを生徒が仲間と共に作り上げる「手作りの体育大会」という強い印象を受けた。独創的な工夫を凝らす生徒のあり方は、指導の優れた成果であり、生徒の自主・自律の精神を育む教育活動として高く評価できる。	A	次年度から3クラス化が現実に進んでいく中で、行事などにおいてはこれまで通りにかないことがないと考える。そこで、自主・自律の精神を育む機会を大切にすべく、行事運営を計画し実行していく。
(2)生徒が達成感を感じられるとともに、行動力やリーダーシップを培う機会にする。	・行動力やリーダーシップを培う機会の設定	・生徒自身が考え、行動できる力を育めるような企画・運営を実施した。また、その中で、自己肯定感や自己有用感を高め、一人ひとりが自信をもてるよう指導を行った。	・機会設定の工夫など、各担当で計画的に運営できるように企画立案を行い、進めていく必要がある。	A	体育大会においても3年生のリーダーシップが印象に残った。文化祭でも臨機応変に進行を進めることができ、学校行事で様々な経験できる機会となっている。	A	学校目標の自主・自律の精神の育成を進める上で、学校行事は特に生徒に活躍する場を設けやすい。今後は、普段の生活の中にも積極的に取り入れていきたい。

学校教育目標		自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」					
学校教育計画		4. アドバンスト・セーフティ・プロモーション・スクール認定校として、全教職員の共通理解の下、共創の考えで組織的、継続的に安全教育の実践的研究を行う。また、池田地区のめざす児童・生徒像に基づいた安全意識・態度および実践的行動力を醸成する。					
本年の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)全教職員の共通理解の下、共創の考えで組織的、継続的に安全教育の実践的研究を行う。	・全教職員の共通理解 ・組織的、継続的な取組みの実施	・年度当初に安全の手引きの確認など、職員会議等を通じて共通理解を図っている。 ・安全点検では教師と生徒が(月2回)隔週で点検をおこない、校内の環境に目を向け安全に対する意識を高めている。 ・生徒対象救命救急講習では非常時に適切に対応できるよう生徒自身が考え、行動できる自信をもてるよう指導をおこなった。	・本校が継続してきた学校安全の取り組みを再整理し、より効果的な安全教育や安全管理の推進を検討していく。カリキュラムの再整理等を行い、教員・生徒がともに意欲的に取り組める学校安全の推進を図る。 ・定期的な安全点検を通して、教員自身も安全に対する意識を高めていく。生徒とともに身の回りの環境に目を向ける意識を高めていきたい。 ・今後は生徒全体にその意識が広がるとともに、更なる発信や取り組みの工夫が必要である。	B	共通理解としての年度当初の取組みや教師と生徒による定期的な安全点検の実施はもとより、生徒対象の救命救急講習など、継続的な取組みが行われている。改善点として生徒の意識の向上が挙げられているが、これは日常的な安全が保たれていることからこそ生じる課題であると考えられる。以上のことから、本取組みは生徒の安全意識を高める教育活動として適切に実施されていると評価できる。	A	次年度より3クラス化の開始に伴い、教員数も減っていく。これまでの継続的な取組みの大切さを改めて確認しながら、職員の意識を保ち実行していくことが大切である。そのために、安全についての組織をより特化したものにし、その実現を図っていく。
(2)安全意識・態度および実践的行動力を醸成する。	・安全意識・態度を醸成する機会を意図的に設定	・生徒会安全委員の意識が高く、校内設備の不具合の報告など、校内環境の変化にも気付く生徒が増えた。安全委員を中心としたヒヤリハットの入力及び分析・発信の継続、教員とともに創る安全点検の実施、生徒発信からスタートする防犯・地震・火災避難訓練等の実施など、知識・技能だけでなく、教職員と生徒が共に安全の意識を高め、実践的行動力へつなげる機会を数多く設定した。 ・研修(視察対応含む)やSPS認証のサポート(実地相談)、セミナー等で安全の取り組みを発信する機会を多数いただいている。その中で、文部科学省学校安全推進セミナーや海外からの視察対応等で生徒が発表をする機会をつくり、生徒たちからは「またやってみたい」という意欲的な声も多数あがっている。	・今後も継続的にヒヤリハットの入力、分析、共有とともに、取り組みの目的や意義を共有することが必要。また、安全の意識を持ち続け、高めていく工夫をおこなう。実際の取り組み(行動・成果)まで繋げていく工夫を引き続き行なっていく。 ・継続してさらに生徒の資質能力が高まる取り組みにすることができるよう実施方法等今後も検討を重ねていきたい。	A	教職員と生徒が共に意識を高めるための機会が多く設定されており、生徒会安全委員が高い意識で取り組んでいる事が評価できる成果である。また生徒が発表する機会を設けており、それに対して生徒たちからは「またやってみたい」という意見が出ることは、高く評価するべき取組である。	A	今年度は、本校への安全の取組みの視察や、SPSに関わる発表において、生徒が活躍する機会を設けることができた。また、近隣の公立小学校にも生徒を派遣し、安全教育を促進する取り組みができています。次年度以降も、継続的に生徒が主体となって取り組む機会を作っていく。

学校教育目標	自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」						
学校教育計画	5. 効率的、効果的な運用により、ICT機器に関わる指導の充実、生徒支援の共通理解など、基本的な業務を実施する。						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) ICT機器に関わる指導を充実する。	・ICT機器を効果的に使用する機会の設定 ・ICT機器を適切に使用できる取り組み	・ICT機器を効果的に使用する機会の設定について、各教科、各学年の総合の学習の際に、探究的な取り組みや学習の記録などでICT機器を使用する機会が設けられている。今年度から第1、第2学年ではChromebookからiPadへと移行し、アプリを学習に取り入れる教科も見られた。 ・ICT機器を適切に使用できる取り組みについて、年間指導計画のもとにアンケートによる生徒の実態調査と学活での全体指導を実施、そのための教材を作成した。また、発達の段階に応じたICT機器の利用に関するレベル設定を行い、自主・自立のもとにICT機器を活用できる情報モラルの育成を図った。	(情報共有) 活用方法に応じた情報共有の工夫、特に個別支援に関する情報管理と活用に関する改善 (生徒支援) 予防的支援は仕組みを継続しながら、組織的な個別支援の仕組みを確立し、不登校課題も含めた進路支援を検討する	A	ICT機器の効率的な活用の機会を設け、ChromebookからiPadへの移行にあたりアプリなどを活用した取組を進めている。加えて、生徒の実態調査と学活での全体指導を、教材を作成した上で着実に実施するとともに、自主・自律の精神に基づく情報モラルの育成を図っている。以上のことから、これらの取組はICT機器を適切に使用できるようにする教育活動として高い成果である。	A	ICT機器は日々進展する中で、効果的な使用だけでなく、適切な使用という観点に基づいた指導が大切である。生成AIの普及に伴い、ICT機器の利用については、ますます加速度的に広まることが予想される。状況の変化を把握し、変化に対応した取組みができるよう、情報関係の部署を専門化する。
(2) 生徒支援の共通理解を行う。	・生徒支援の共通理解を効果的、効率的に行う方法を確立し実行 ・アンケートを実施し、結果を効果的に利用	・業務改善を図りながら、必要な情報共有と対応を試み、枠組みはできた。生徒支援に生かされる情報共有のための改善が必要である。 ・全ての生徒を対象とした予防的な支援に重点をおいた。各学期の重点目標の設定、自殺予防等の安全に関するアクセス紹介、あったかご、環境整備、いじめ・QIアンケートの活用、SC連携、子育て講演会等が挙げられる。 ・QIに関する研修や巡回相談の実施により、職員の生徒支援に関する力量が高まった。	(情報共有) 活用方法に応じた情報共有の工夫、特に個別支援に関する情報管理と活用に関する改善 (生徒支援) 予防的支援は仕組みを継続しながら、組織的な個別支援の仕組みを確立し、不登校課題も含めた進路支援を検討する	A	業務改善の中での枠組み作りができたことに加えて、生徒支援に向けての改善点の視点があることは意義深い取組みである。それに加えての研修や相談を含めた取組みから職員の生徒支援に関する力量の向上は評価できる。	B	現状の課題を分析し、効果や目標を確認しながら、より課題に即した取組みを実行する。その為、取組み計画の見直しを行いつつ、新たな組織体制の構築を進め、効果的な取組みを実行できるよう努める。

学校教育目標	自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」						
学校教育計画	6. 大学・大学院・附属学校池田地区、他学校等の連携、保護者・地域との連携						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 大学、池田地区および他校等との連携を図る。	・池田地区将来構想に基づく、大学教員および小学校、高校との連携・協議の充実 ・積極的な他校等からの視察の受入れ等ネットワークの拡充	・池田地区将来構想に基づき、多方面と連携を行った。特に、令和8年度から高校への希望者全員進学に合わせ、高校とは協議の機会を設け連携強化を図った。しかし、まだ協議の段階であり、具体的な取組みは来年度以降の予定である。 ・他校からの視察は、安全教育、生成AIなど、幾つかの訪問依頼があり積極的に受け入れを行った。	・中高の連携については相互の教育活動に対する理解を深める機会を増やすことで、さらに効果的な取組みにつながる。具体的には、課題と方針の共有、協働的な活動が挙げられる。	B	池田地区将来構想については、第2期改革構想に向けて、自主・自律の精神に基づいたコミュニケーション力・探求力などに重点をおく方針を大切にしながら協議を進めている。教育カリキュラムの連携や教員配置などについては、慎重な検討を要する課題であることから、今後の検討を進める上での初期的取組みとして達成できていると評価できる。	B	今後、中高の連携をさらに進めるべく、担当者や担当部署を決め、定期的な会議の設定を行い、議論を深めながら進める体制を構築していく。また、教員全体で共通理解ができるよう、職員会議での伝達や確認、議論を行う。
(2) 保護者・地域との連携	・登校立ち当番等のPTA活動の活性化および行事等を通じた保護者との連携 ・警察、消防、市役所、地域自治会との連携	・PTA活動を中心とした保護者との連携を強めるため、学校と保護者が共に子どもの成長を見守る機会を大切にしたいと考えた。具体的には、体育大会の「デモスト」の映像配信、生徒の活動発表会の公開と早期の事前連絡などを行った。 ・地域との連携については、SPSサポーターとして、従来の関係機関に加え、阪急電鉄にも加わっていただき連携の輪が広がっている。	・来年度も、PTA活動を中心として、学校と保護者が共に子どもの成長を見守る機会を大切にしたいと考えた。 ・地域との連携についても、引き続き積極的に広げていきたい。	A	様々な学校行事が、PTA活動と連携した支援体制が構築されていることは特筆すべきことである。そういった取組みから学校と保護者が一体となって、子供の成長を見守る機会が保たれていることは高く評価できる。地域連携が広がっていることについても、継続的に取り組まれている成果である。	A	3クラス化に伴い、生徒数とともに保護者家庭数も減となる。これまでの継続的な保護者（PTA）との連携を保つために内容の取捨選択をしつつ、計画的、効果的な取組みを意識して行う。地域連携については、広めることから深めることにも視点を移し取り組んでいきたい。

学校教育目標	自主・自律の精神の育成「全人教育を鑑み、知識と感情と意志をバランスよく調和させることによって、自分自身で考え、価値判断でき、責任ある行動がとれる人間の育成をめざす」						
学校教育計画	7. 教育実習の充実						
本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 教育実習の充実	教科指導や学級指導において、指導教員を中心とした個々の教育実習生の課題を把握、各教科・実習部・管理職・大学と協力体制の確立	・今年度は、実習生をどのように成長させるかという視点で、実習を行った。実習生をフォローする体制を明確にすることにより、参加した実習生全員が無事、途中離脱することなく実習期間を終えることができた。	・来年度も引き続き、実習生を支援し成長させるという視点で実習を実施するとともに、教育の魅力も伝えていきたい。	A	実習生をどのように成長させるかという視点から、実習生をフォローする体制を明確にし、教育実習の充実に取り組んでいることは、教員養成大学の附属として、重要な役割を話している。	A	今年度、計画実行できた実習生をフォローする体制を継続的に取組む。実習担当は単独の校務分掌として位置づいていたが、今後は、部署の中に位置付け、組織的に継続して取組めるようにする。